

## 日本のマンガ・アニメにおける 安全な自殺表現の評価基準の作成と心理的影響の検証

研究代表者：高橋 あすみ（北星学園大学社会福祉学部心理学科・専任講師）

当該年度の研究期間：令和 7 年 10 月～令和 8 年 3 月（3 年計画の 1 年目）

### 要旨：

自殺報道や映像作品には、模倣自殺を誘発するウェルテル効果だけでなく、自殺予防につながるパパゲーノ効果が存在することが指摘されている。しかし、日本の主要文化コンテンツであるマンガ・アニメ領域における自殺描写については十分な研究が行われていない。本研究は、日本のマンガ・アニメにおける安全な自殺描写の評価基準を構築し、制作現場や教育・啓発の場で活用可能な指針を提案することを目的として実施した。本年度は基盤構築段階として、自殺描写を含む作品の収集と、安全性評価項目案の作成を行った。

作品収集では、国立国会図書館 NDL サーチ、メディア芸術データベース、電子コミック・アニメ配信サービス等を活用し、自殺関連作品を探索した。その結果、マンガ 115 作品、アニメ 26 作品、計 141 作品のデータベースを作成した。作品には、いじめやうつ等を背景とした自殺、自死遺族の経験、希死念慮を扱うエッセイなど多様な表現が含まれていた。

また、WHO の自殺報道ガイドラインや映像関係者向けガイドライン、BPO 放送基準等に加え、マンガ・アニメに関する先行研究を整理した。これらを踏まえ、自殺描写の安全性を評価するための 54 項目からなる暫定的評価指標案を作成した。評価項目は、模倣リスク、予防的要素、視聴者への配慮、媒体特有の演出など 6 カテゴリーから構成された。さらに、自殺予防研究者および制作関係者を対象にデルファイ法による調査を実施し、項目の明確性や重要性、実現可能性について意見収集を行った。今後は追加調査や制作関係者へのヒアリングを通じて、現場で活用可能な指針へと精緻化していく予定である。

## **Developing Safety Evaluation Criteria for Suicide Portrayals in Japanese Manga and Anime and Examining Their Psychological Effects**

Principal Researcher : Asumi Takahashi (Assistant Professor, Department of Psychology,  
School of Social Welfare, Hokusei Gakuen University)

The Current Research Period : October 2025 to March 2026 (1st year of a 3 year plan)

### **Summary :**

Suicide portrayals in media have been discussed not only in relation to the Werther effect, which may increase the risk of imitative suicide, but also in relation to the Papageno effect, in which appropriate portrayals may contribute to suicide prevention. However, compared with news reporting and film media, suicide portrayals in Japanese manga and anime have received limited scholarly attention despite their cultural influence and popularity. The present study aimed to develop evaluation criteria for safe portrayals of suicide in Japanese manga and anime, and to propose guidelines applicable to creative practice, education, and public awareness activities. During the first year of the project, foundational work was conducted through the collection of relevant works and the development of preliminary evaluation criteria.

To collect relevant works, searches were conducted using the National Diet Library Search, the Media Arts Database, electronic comic and anime distribution services, and related reference resources. As a result, a database of 141 works (115 manga and 26 anime titles) related to suicide was constructed. These works included portrayals of suicide associated with bullying, depression, and other psychosocial problems, as well as narratives involving bereavement by suicide and essays describing suicidal ideation.

In parallel, existing guidelines and prior studies related to suicide portrayals were reviewed, including the WHO guidelines for media reporting on suicide, guidelines for filmmakers and stage/media professionals, the BPO Broadcasting Standards, and previous studies on manga and anime. Based on these findings, a provisional evaluation framework consisting of 54 items was developed. The framework included six categories: imitation risk, preventive elements, consideration for audiences, anime-specific expressions, manga-specific expressions, and considerations during the production process. Additionally, a Delphi survey was conducted among suicide prevention researchers and manga/anime creators to assess the clarity, importance, and feasibility of the proposed items. Future work will refine the framework through additional surveys and interviews with creators to develop practical guidelines applicable in creative settings.

## 1. 研究目的

ウェルテル効果 (Phillips, 1974) は、自殺のメディア報道が模倣自殺を引き起こす現象として知られ、研究や対策の議論が進められてきた。その一方で近年は、自殺からの回復や希望を含む描写が視聴者の自殺リスクを低下させたり自殺予防につながったりする、パパゲーノ効果をもたらす可能性が報告されている (Niederkrötenhaler et al., 2010)。こうした効果は、自殺の事実が扱われたときだけでなく、架空の自殺についても見られることが示唆されている (Niederkrötenhaler et al., 2021)。つまり、自殺の物語や描写が発信されることには肯定的な側面と否定的な側面があると考えられ、その境界を明確にし、安全な表現のあり方を明らかにしていくことは重要である。

報道の分野では、世界保健機関 (WHO) による自殺報道ガイドラインが普及している。日本でもガイドラインの活用が推奨され、特に著名人の自殺があった際のテレビ報道におけるガイドラインの遵守は広まりつつある (例：宮下, 2023)。芸術分野では三次元の映画や舞台の影響に関する研究が進んでおり (例：Till et al., 2015)、WHO の発行したガイドラインの日本語版『自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識』も整備されている。

ところが、日本の主要文化コンテンツであるマンガやアニメについては、その市場規模や人気に比して、十分な検討がなされていない。特に若者のメンタルヘルスや自殺の問題には、サブカルチャーの影響が示唆されており (Imataka & Shiraishi, 2025)、先行研究の指摘するウェルテル効果がマンガやアニメにおいてもみられている可能性がある。しかしながら、芸術作品においては、作者が自身の体験や思いを表現する自由が尊重されることは非常に重要である (高橋, 2025)。さらに作者の自殺の表現を通して、読者や視聴者が救われることもあるはずである。そこで、ウェルテル効果の知見から懸念される自殺念慮への負の影響や模倣リスクを最小限に抑えつつ、作者の表現意図を尊重したマンガ・アニメにおける自殺描写のあり方を体系的に検討することが必要である。

以上を踏まえ本研究の目標到達点は、日本文化に根差したマンガ・アニメ領域における安全性に配慮した自殺描写の評価基準を構築し、現場で活用可能な指針を提案することである。マンガやアニメは、制作現場のみならず、自殺対策における啓発・教育活動でも活用されている。そのため、安全な自殺描写に関する指針を整備することには、社会的意義がある。

研究 1 年目の本年度は、マンガ・アニメの安全性を評価できるようにする基盤づくりを目標とした。具体的には自殺描写を含むマンガ・アニメ作品の収集と、国内外のガイドラインおよび先行研究の整理を行い、それらを踏まえてデルファイ法による評価項目案を作成することを目的とした。

## 2. 研究方法

マンガ作品は、「国立国会図書館 NDL サーチ」や「メディア芸術データベース」でのキーワード検索、電子コミックサービス「コミックシーモア」でのキーワード検索、「レファレンス協同データベース」に登録された自殺の作品に関するレファレンス事例を参照した。アニメ作品は「メディア芸術データベース」でのキーワード検索、アニメ配信サービス「d アニメストア」でのキーワード検索を行った。また媒体を問わず、Wikipedia の「心中を扱った作品」カテゴリー、後述する先行研究、生成 AI や SNS を補助的に活用した探索的検索、関連領域の研究者や学生からの情報提供により、自殺関連作品候補を抽出した。作成した作品リストをもとに、電子コミックサービスやアニメ配信サービス等を利用し、分析対象候補作品の収集を進めた。また、一部作品については試験的に内容確認を行い、評価項目案との対応可能性を検討した。

次に作品の安全性の評価指標を策定するために、先行研究と既存のガイドラインに基づいて、安全性評価項目案を作成した。まず先述した WHO の自殺報道ガイドライン、映像舞台関係者向けガイドラインの他、映画鑑賞の対象年齢を決めた「映画分類基準」、放送倫理・番組向上機構（BPO）による「放送基準」、不健全図書を規定する「東京都青少年の健全な育成に関する条例」などの基準について情報収集を行った。また、Gauld et al. (2019)が制作した、自殺行動を描いた架空のシーンを定量的に特徴づけるための分析ツール MoVIES（Movies and Video : Identification and Emotions in Reaction to Suicide）や、マンガ・アニメに関連する領域の先行研究をレビューした。それらをふまえて、既存のガイドライン項目をマンガとアニメに相当する表現に修正したり、マンガやアニメ特有の項目を新たに創出したりして、評価指標の暫定案を作成した。次に意見集約に用いられるデルファイ法を用いた調査を実施した。スノーボールサンプリング、及び Web 上での調査募集の呼びかけを通して、自殺予防研究者 20 名、マンガ・アニメ制作関係者 3 名から回答を得た。調査内容は、作成した評価指標の項目案に対する表現の明確性や、自殺予防への重要性、制作現場での実現可能性について尋ねた。

### 倫理面への配慮

デルファイ法調査は北星学園大学研究倫理委員会の承認を得た(25-研倫第87号)。調査実施前には、研究目的・内容・参加の任意性・途中辞退の自由などを明記したインフォームド・コンセント文書を提示し、同意を得た。研究協力者には、研究参加の負担に応じた謝礼を支払うこととした。調査は匿名で行われたが、事務手続きに必要な個人情報は別途収集し、分析用データと切り離して保管した。分析や成果公表においては、個人が特定される情報は一切含めていない。また、本研究で扱う著作物については、著作権法および関連法令を厳守し、第三者の権利を侵害しないよう適切に管理している。

### 3. 研究結果

現時点までに、自殺に関連する可能性のある 141 作品（マンガ 115 作品、アニメ 26 作品）のデータベースを整理した。作品の中で扱われている自殺の描写のあり方を抜粋すると、①いじめ、不登校、借金、整形、うつなど登場人物の悩みや問題に伴う帰結として描写されるもの、②医療保健現場などの支援者が会える登場人物が抱えている問題として焦点が当てられたもの、③「死にたがり」「自殺未遂をしたことがある」など登場人物のキャラクター設定として描写されているもの、④実際の自殺事例を題材としたもの、⑤作者の日常における希死念慮や自殺企図が扱われたもの、⑥自死遺族としての経験が扱われているもの、⑦自殺を考える人物の前に現れる超常的存在をメインキャラクターとしたファンタジー、⑧奇怪な自殺事件から始まるサスペンスやミステリーなどが挙げられた。ただし、これらの分類は、あくまで自殺予防学的な観点からの事後的な分析であり、制作意図を規定するものではない。また、本研究では著作権、及びセンシティブな内容を含む作品を扱う研究倫理上の配慮から、本報告書において個別作品一覧の掲載は行わない。

さらに安全性評価項目案の作成のために先行研究をレビューした。地理学の観点で日本のマンガやアニメ作品を検討した O'Kane (2016) はフィクション作品が現実を反映し、自殺が解決策や救済、新たな始まりのようにロマンティックに描かれたり美化されたりしている側面を考察するとともに、センセーショナルな描写が若者の死生観や、自殺の名所などの日本の地理的空間に影響を与えていることを指摘していた。Mack (2025) は自己犠牲的な自殺、すなわち他者を救うための自殺の表現であれば、若者には肯定的に受け止められ、絶望による自殺の表現よりも心的負担は少ないことを示していた。一方でウェ

ルテル効果をもたらしたドラマ『13 の理由』のように、自殺を復讐の手段として描いたり謎解きのようなエンターテインメント性を優先したりして興味を引く形で描くことには警鐘を鳴らした。また Seko & Kikuchi (2021) は、2000～2017 年に出版された自傷行為を扱った日本の漫画作品の内容を分析し、ほとんどの描写で自傷行為は少女のネガティブ感情への対処法として扱われていたが、男性読者を対象とした漫画では「メンヘラ」と呼称される乙女の性的記号として描かれている傾向があることを明らかにした。

これらの先行研究および既存ガイドラインを踏まえ、自殺描写の安全性を評価するための評価指標案を作成し、暫定的に 54 項目にまとめた。評価項目は、①模倣リスクに関する項目（描写、物語構成）、②予防的な要素に関する項目（描写）、③読者・視聴者に対する配慮の項目、④アニメ特有の演出、⑤マンガ特有の演出、⑥制作過程における配慮の 6 つのカテゴリーに基づいて構成した。さらに、第 1 回のデルファイ調査の結果、一部の評価項目については、重要性や実現可能性に関する評価が分かれる傾向がみられた。なお、これらの項目は、既存ガイドラインや先行研究をもとに探索的・包括的に抽出したものであり、今後の調査を通じて項目の整理・統合・精緻化を進め、最終的な評価基準として完成させる予定である。

#### 4. 考察・結論

本年度の研究により、マンガ・アニメ領域における自殺描写の安全性評価に向けた基盤として、分析対象作品のデータベースや評価指標の暫定版が構築された。特にマンガやアニメでは、視覚的演出やシリーズを通じた登場人物との長期的接触など、報道や映画とは異なる特性が存在しており、既存のガイドラインのみでは十分に整理しきれない課題があることが示唆された。

また既存のガイドラインに照らし合わせながら試験的に収集作品を概観した結果、今後検討が必要と考えられた点として、内容に合わせた視聴者・読者のゾーニング、自殺行動を模倣・学習しうる描写、自殺場面が視覚的に強調される演出が挙げられた。一方で、登場人物の苦悩から支援につながるまでの過程や、自殺企図をした登場人物の回復の物語など、結果としてパパゲーノ効果の観点から意義深い表現上の特徴を有する作品も存在していた。今後は制作関係者へのヒアリングや追加調査を通じて、現場で活用可能な現実的指針へと精緻化していく予定である。

#### 5. 政策提案・提言

現時点では、自殺描写を規制対象として捉えるのではなく、表現の自由を尊重しつつ、読者・視聴者への影響を踏まえたメディア・リテラシー向上のための基礎資料として、本研究の知見を蓄積・整理していく必要がある。マンガやアニメを制作する立場や、読者・視聴者の立場からの意見を十分に反映できていないため、今後は多様な視点を踏まえながら自殺描写や作品活用のあり方について検討していく必要がある。特に世代を越えて愛されるマンガ・アニメ領域においては、制作現場、教育現場、支援現場が連携しながら、安全性に配慮した表現について対話を重ねていくことが重要である。

#### 6. 外部への成果発表

- (1) 学会誌・雑誌等における論文一覧（国際誌 0 件、国内誌 0 件）

なし

- (2) 学会・シンポジウム等における口頭・ポスター発表（国際学会等 0 件、国内学会等 0 件）

なし

### (3) その他外部発表等

#### 【パネリスト】

高橋あすみ (2026) マンガ・アニメの自殺表現 日本自殺予防学会第2回メディアカンファレンス (2026年3月7日開催・東京)

## 7. 引用文献・参考文献

- Gauld, C., Wathelet, M., Medjkane, F., Pauwels, N., Bougerol, T., & Notredame, C. E. (2019). Construction and validation of an analytical grid about video representations of suicide (“MoVIES”). *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 16(15), 2780. <https://doi.org/10.3390/ijerph16152780>
- Imataka, G., & Shiraishi, H. (2025). Youth suicide in Japan: Exploring the role of subcultures, internet addiction, and societal pressures. *Diseases*, 13(1), Article 2. <https://doi.org/10.3390/diseases13010002>
- Mack, E. (2025). Fictional stories with real consequences: A study of adolescents, media, and suicide (Doctoral dissertation, University of Alberta).
- 宮下牧恵 (2023). 著名人の自殺はどのように報じられているか—上島竜兵さんの事例分析の試み—. *放送研究と調査*, 73 (3), 54–69.
- Niederkrotenthaler, T., Kirchner, S., Till, B., Sinyor, M., Tran, U. S., Pirkis, J., & Spittal, M. J. (2021). Systematic review and meta-analyses of suicidal outcomes following fictional portrayals of suicide and suicide attempt in entertainment media. *EClinicalMedicine*, 36, 100922. <https://doi.org/10.1016/j.eclinm.2021.100922>
- Niederkrotenthaler, T., Voracek, M., Herberth, A., Till, B., Strauss, M., Etzersdorfer, E., Eisenwort, B., & Sonneck, G. (2010). Role of media reports in completed and prevented suicide: Werther v. Papageno effects. *The British Journal of Psychiatry*, 197(3), 234–243. <https://doi.org/10.1192/bjp.bp.109.074633>
- O’Kane, M. R. (2016). Geographies of suicide and the representation of self-sacrifice in Japanese popular culture and media (Unpublished bachelor’s honours dissertation). Queen’s University Belfast.
- Phillips, D. P. (1974). The influence of suggestion on suicide: Substantive and theoretical implications of the Werther effect. *American Sociological Review*, 39(3), 340–354. <https://doi.org/10.2307/2094294>
- Seko, Y., & Kikuchi, M. (2021). Self-injury in Japanese manga: A content analysis. *Journal of Medical Humanities*, 42, 355–369.
- 高橋あすみ (2025). 自殺に関するメディア表現の課題とその支援. *自殺予防と危機介入*, 45(1), 22–26.
- Till, B., Strauss, M., Sonneck, G., & Niederkrotenthaler, T. (2015). Determining the effects of films with suicidal content :A laboratory experiment. *British Journal of Psychiatry*, 207(1), 72–78. doi :10.1192/bjp.bp.114.152827

## 8. 特記事項

### (1) 健康被害情報

なし

### (2) 知的財産権の出願・登録の状況

なし